

形見

好枝

形見

平栗好枝

我が家の調度品の中では古い方の部類に入っていた、柱時計と猫こたつの話である。

時計の方は結婚した時両親が買ってくれたもので、時折ネジを巻くようになっていて、忘れると針を進めるのをさぼった。そして、数年に一度は分解掃除をする。

父が時計職人だったので、そのへんのケアはすべて任せっきりだった。

文字盤の中央には日本が誇る時計のブランド名、セイコーの文字がローマ字で横にくっきりと書かれている。父が吟味してくれたのと、機械の質がよかったのかよく働き、おだやかな音色で時を知らせた。

しかし、時代は移り、電池式の目新しい製品が出回るようになってきて、その時計はいつか箱などに入れられ、お蔵入りとなってしまった。たまに荷物の整理などでその箱を動かしたりすると、それでもボン、ボンと、ハットするほどのきれいな音で、自身を主張するかのように鳴り、私の心を痛ませた。

何とかもう一度、掛ける場所を作りたいと思いつつ、コンクリート壁ではそれも叶わなかったのと、おだやかな音色でも、一時間毎に時を告げられるのが夜中も続くと、現代の生活に合わなくなっているようにも思え、動かすこともなくきてしまった。

半世紀以上も手元に置きながら、その半分ほどを押し入れの中で虚しく過ごさせ、時計としての役目を奪ったような気がして、時計と、それを贈ってくれた父に、良心の呵責を感じていた。

いつか自分で納得のゆくかたちで何とかしなければ：：。ずっと気にかかるものの、ひとつになっていた。

猫こたつの方は、年数からいえば悠に百年くらいはたっている代物である。泥で作られている。キャンプのテントのような形で、四隅が空いていて、そこから炭を入れた器を出し入れする。縦横三十センチくらいの小型で布団を掛けて足を入れると、なんともいえない温もりがあった。猫にとっても好きそうな所である。それで「猫こたつ」というのかも知れない。これも、結婚して間もないころ夫のお姑さんから私に譲り渡されたのだと思うのだが、経緯などは覚えていない。

私の来るずっと前からあったらしいので、かなり古い物なのだろうとの推測はついていたが、詳しい事を聞いておけばよかったと今更に後悔している。もうこのような珍品にはお目に係ることはないだろう。

時計はとにかく「猫こたつ」などは十分に、骨董品としての価値があったのではないかと思う。骨董といっても、床の間などに置くものではなく、最近よく見かける公園や、お寺の境内などで開かれている、骨董市などのことである。あんな所に持っていったら結構珍しがられるのではないかと、何回も持って行こうとしたが、車が無いので運ぶことができず、結局、思い切ってゴミ置き場にだすしかなかった。

しかし、出したものの、やはり翌日取り下げにいったのだがすでに遅かった。

驚いたことに、そのような所で目ぼしい物を見つけ持って行く人がいるのである。捨てたのだ

から、私にはもう何の権利もないわけで諦めるしかなかった。

「時計も」、「猫こたつ」も調度品とよぶには小さいものだったが、遠い日から日常の生活における密着の度合いは濃く、愛着があった。

思い出という時を刻んで去った二つのものは、私の胸のうちでは、父と義母の忘れられない一
双の形見だったのである。

平成二十年九月

課題「刻む」